

# 高校生活で養う課題意識・コミュニケーション力 これからの推薦・AO入試指導

本連載では、受験生の経験や志望理由、論理性やコミュニケーション能力を問う推薦・AO入試に向けての指導法を考えてきました。高大接続改革の進む今、これまで多くの大学が蓄積してきた推薦・AO入試の方式がさらに広がるのが予想されます。大学が問うていること、問われている力を身に付けるための指導法、生徒の志望理由の引き出し方などをお伝えしてきた連載の最終回は、大学現場に身を置く藤岡氏からのメッセージです。

最終回

## 見たい未来を一緒に作りませんか？ 大学から伝えたい先生方へのメッセージ

3年間続いた本誌の連載では、推薦・AO入試では何が問われるのか、その対策や先生方の疑問への回答をお伝えしてきました。

現代は、「VUCA」すなわち Volatility (変動性・不安定さ)、Uncertainty (不確実性・不確定さ)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性・不確かさ)の時代と言われています。昨今の高大接続改革や大学入試改革は、推薦・AO入試で問う本質的な内容の評価に加えて、AIと共にある未来やVUCAの時代を生き抜く力も問う改革として定着しそうです。この改革の行く末が見えてきた今、本誌での私の役目は一段落だと思ひ、今回の寄稿を最終回といたします。

2015年当時、私は高校生を指導する立場でした。現在は、石川県金沢市にある北陸大学で経済経営学部教授として、大学生の指導をしています。教え子たちが大学を卒業し、企業や省庁に就職するさまを見

て、思うこともあります。先生方が指導されてきた高校生が大学でどのような学生生活を送っているのかを限られたケースではありますが、語れる立場になりました。今回は、先生方から大学現場から見える実情をお伝えし、今後のご指導の役に立てていただければと思います。

### 体験を言語化できない学生 求められる価値観 (Being)

推薦・AO入試ではさまざまな体験が評価されます。そのせいか、さまざまな体験をアピールする学生が多いのですが、体験した事実のみアピールするいわば自慢大会になっている感もあります。確かに、自身の轍をアピールすることは大切ですし、その行為自体が自己効力感を高めると心理学者のA・バンデューラも言っています。

しかし、この連載で何度もお伝えしてきたように、大切なのは「体験・経験した事実ではなく、そのなかで何を信じ、想い、行動し、その結果何

を得たのか」ということです。自分なりに得た教訓、気づき、知恵などの総体である価値観を自己認識することが、今後、学生たちが社会で直面するさまざまな状況や壁、困難に立ち向かう武器になります。

イチローや武井壮など有名なスポーツ選手は言葉が巧みなのもうなずけるでしょう。彼らは常に内省を繰り返し、不断のスキル向上に取り組んでいます。あらゆる状況で、うまくいく方法を再生し、失敗を回避するには価値観の言語化が有効です。この社会を生き抜く武器は思考方法だけでなく、どの思考方法を選ぶのか、なぜその方法を選ぶのかの根拠となる価値観にあります。

行動 (Doing)、思考 (Knowing) だけでなく、どう生きるかの価値観 (Being) が重要であり、それが社会で生き抜く自分らしさ、つまり個性です。その多様な個性が集まればこそ、大学本来の目的である「答えがない問いについて、多様な視点で対話・

議論し答えを追究する過程で学ぶことが可能となるのでしょうか。

### 高校時代から 価値観の言語化を

「どう生きたいのかという価値観は、大学で育めばよいではないか」と言われそうですが、自身の価値観に基づく進路選択を希望するのであれば大学では遅いのです。

高校では、ただ単に多様な体験・経験をさせるだけでなく、体験・経験を通じて行動、思考、価値観を言語化することが重要だと私は考えています。体験・経験を言語化する方法には、例えばSTAR法(Situation(状況・課題)、Task(やるべきこと)、Action(行動)、Result(結果)の4つのポイントで経験を振り返り、整理する方法)があります。現在、大学でも研究実践中です。

自身の体験・経験から得たことを言語化し、学ぶ方は、国家の思惑

に縛られない、地方の自立やグローバルな社会で活躍する独立した個人を育む学びでしょう。

### 高校時代の志望を しなやかに変える学生が伸びる

推薦・AO入試において、志望理由書は生徒と大学のマッチングを図るうえで重要な手掛かりです。しかし、今まで多くの生徒を教えてきて、気づいたことがあります。それは、高校生のときに考えた志望理由にかかわらず、しなやかに学習目的を変えられる学生の方が生き生きと学んでいることです。

なぜでしょう。若い学生にとって興味があること・学びたいことが数年変わらない方がそもそもまれかもしれませんが。新たな環境での多くの友人や教員との出会い、多様な知識や知恵に出会えば、興味関心が変わらない方が不思議です。自身がなぜ今これを知りたいのかを言語化できる学

生が、学習意欲を維持・向上できることは想像に難くないと思います。

興味関心を言語化するとき、大切なことはやはり価値観です。価値観は何かを選ぶときの良し悪しの判断基準になります。つまりは価値観を明確にできる学生は、しなやかに学ぶ目的を変えられるということ。価値観を明確にしたうえで学習は当事者意識を生み、主体性を醸成するのだと私は考えます。

### 先生や地域の大人を 価値観のロールモデルに

では「価値観を明確にする」ということは、テクニックだけでできるものでしょうか。否、それだけでは難しいでしょう。なぜなら価値観を明確にするメリットや、そもそも価値観とは何か、それがどう行動や生き方に反映されるのかということだけは口だけで伝えるられないからです。昭和的な発想になります。昭和の発想を伝えること

ができるのはやはり大人の背中だと思っています。

先述のA・バンデューラは自己効力感を生む要素の一つに、他人の代理体験を挙げています。近くにいる大人、つまり先生や近くにいる地域の大人の価値観や、ワクワクドキドキが生徒に伝わります。多様な大人との出会いや、先生方自身が価値観を明確にし、ストーリーとして伝える場を作るとよいでしょう。先生方、その準備はできていますか？

### 高大接続・大学入試改革を 共に研究しませんか

誌面からは離れますが、もし、私たちの研究や取り組みに興味がある先生がいらっしゃれば、ぜひ、お声がけください。私たちは、出し惜しみはしません。「見たい未来にまず自分になる」(ガングー)。見たい未来を一緒に作りませんか？

藤岡慎二  
北陸大学教授  
株式会社  
Prima pinguino  
代表取締役



ふじおか・しんじ●1975年生まれ慶應義塾大学大学院修了。数学や生物の大学受験対策を教える塾講師を経て、大学院でキャリア教育の重要性に気付き、研究を開始。小学生から社会人までを対象とした現場指導経験を有し、推薦・AO入試対策、社会人基礎力の指導や教材・プログラム開発を大手大学受験予備校や高校・大学で行う。島根県立隠岐島前高校をはじめとし、行政と協業し教育を通じた地方創生に取り組み、現在、北海道から沖縄までの高校魅力化プロジェクトに参画、高校連携型の公営塾を運営。